BULLETIN OF JAPAN BOOK IMPORTERS ASSOCIATION

JBIA 洋書輸入協会会報

Vol. 33 No. 1（通巻380号）1999年1月

謹んで新春のお慶びを申し上げます

1999年1月

理事長　鈴木信夫

皆様明けましておめでとうございます。

世の中は厳しいスタートでしたが、“おめでとう”だけは元気良く言いたいものです。

今年は架け替えられた日本橋の米寿を記念して、箱根駅伝が中央大通りを通りましたが、たいへん大勢の人があの通りに集まりました。何か賑わい事があると人は集まる、という大事さを改めて教えられた思いがしました。

そういう訳で、今年名前を変えて新発足したことがこの新年会の賑わいのもとになったかという気もいたしますので、今日は明るく和やかに飲み交わしていただきたいと思います。

さて、例年新年会で掲げます当協会の旗が、名称は変えたものの製作が間に合わず今回はございません。ご承知のとおり昨年11月26日の臨時総会で新しい規約が承認され、当協会が再スタートいたしましたが、実質的には本日以降新しい年の理事会や委員会の活動の中で、初めて規約改正の意味あるいはその効果が皆様方の手応えのある反応で立証されなければなりません。そうした重みをもつ一年の最初でもございます。

世の中の状況がなかなか良くないとは言うものの、考えてみますとお互いそれぞれにとって厳しくない年は無かったのではないか、良い時は良い時なりに、悪い時は悪い時なりにずっと厳しかったような気がします。そうしますと、今年だけが厳しい訳ではないことになります

目　次

新年の挨拶　鈴木理事長 ……1
理事会報告・海外ニュース ……2
文化厚生委員会だより ……3
出版文化史逍遥(33) ……4
リレーションシップ・マーケティングのすすめ ……5
ウサギ年にはウサギ跳び ……6・7
広　告 ……8

ので、むしろ協会の新しいスタートを大事にしてお互いの仕事をして行けば良いのではないかと思います。

新しい年の私どものビジネスの育成、そのために力を合わせるべきところは合わせ、争うべきところはフェアに争い、日本のInternational Publicationの分野における我々の存在を示して行こうではありませんか。

理事会報告

12月14日（月）

1．事務局作成の臨時総会報告書案文を点検し、大筋で承認した。

2．改正規約の最終点検を行い、規約書作成を事務局に指示した。

3．98年中の活動を総括した。

1)月例理事会に理事長以下全理事が毎回出席し、協会活性化の先頭に立った。

2)専門委員会を設置して規約改正を推進した。

3)研鑽のためのセミナーを2回開催したが、一層充実、定着させたい。

4)中断している共同物流プロジェクトを実施に向けて継続する。

5)日常の協会活動のPRが足りない。各委員会活動を会報誌面で報告することとする。

4．99年の活動目標について論議した。

1)専門委員会を設置して会員増強運動を展開する。

2)2000年度ダイレクトリー電子化のための準備を開始する

3)新生協会の活動状況を見たうえで、2000年以降に書籍関連団体・諸機関代表者を新年賀詞交換会等に招待し、積極的な交流を図る。

4)輸入出版物に対する消費税軽減（又は撤廃）の働きかけは和書業界と共同歩調をとるべきである。

5．考古堂書店（新潟市）の退会（11月30日付）を承認した。

《お断り》

今月号よりタイトルを「日本洋書協会会報」とする予定でしたが、新名称の英文略称JIPAに法律上の疑義があるため、当分の間従来のタイトルを使用します。ご了承ください。　会報委員会

海外ニュース

ワイリー社好調！

1997年5月から1998年4月までの1年間で、Wiley Europeの売上は9.3%、経営利益は8.1%の上昇を記録した。売上高は5,140万ポンドから5,620万ポンドへ、経営利益は690万ポンドから740万ポンドへとそれぞれ増加した。課税前収益は860万ポンドから830万ポンドへと3.5%の下落だったが、これには外貨為替による損益がいくぶん影響している。同社の利益率も昨年の13.4%に比べ今年は13.2%と安定している。同社の規模は1992年当時のちょうど2倍となっている。欧州市場での売上は全体の30%を占め、5%の伸びを示した。全体の26%を占めるイギリス市場は10%アップの1,450万ポンドの売上を残した。アメリカ市場（全体の19%）での売上は19%アップの1,090万ポンドであった。この1年でWiley Europeが2000年問題に関わる処理にかけたコストは合計19万2千ポンドで、今後すべてを解決するため更に63万ポンドかかると見込まれている。同社親会社であるJohn Wiley & Sonsの同期間における経営利益は79%急騰して4億6,710万ドル（2億8,000万ポンド）、売上の伸びは8%を記録した。

また、John Wiley & Sonsは、世界で最も注目される会社のリストに、マイクロソフト、コカコーラ、フォード、マクドナルドなどと並んでランクインした。これはFinancial Times最新号に掲載されたもので、世界53ケ国の大企業経営者が投票して決定したリストである。同社はトップ40社のなかでは唯一の出版社で、ベネトン（ファッション）、ブリティッシュ・エアウェイ（航空会社）、マークス&スペンサー（上流向けデパート）などより上位にランクされている。

THE BOOKSELLER/December 4, 1998

January 1, 1999

文化厚生委員会だより

フォーティーラブ、テニス合宿に参加して

去年の12月5日(土)、平成10年の最後のテニス合宿が千葉県野田市のロイヤルSCテニスクラブで開催された。

朝からあいにくの雨模様で私は現地へ向かう車の中で晴れるかなと少し期待しつつ、午前9時ごろ到着すると数名の人たちが小雨の中テニスを楽しんでいました。雨にもかかわらず、参加者の皆さんはダブルスのゲームを中心に午前中いっぱい体を動かして楽しみました。さすがに雨が強くなって午後からは早めの忘年会へと突入しました。クラブハウスの中で豪華な食事を囲み、ビール日本酒を飲みながら、雨で冷えた体をあたためながら、約15人ほどのパーティで1年間の合宿の思い出や出来事を語り合いました。この合宿は毎年、4月、6月、8月、10月、12月の年5回開催で去年はのべ100人ほどの参加者でした。参加者の皆さんの中にはプロ級の腕の方もいらっしゃって、初心者の方は（私を含む）に親切に教えて下さるので、だれでも気軽に参加し、楽しめると思います。特にテニスの後は必ずパーティー（飲む会？）があるので、違う年代の方々や普段あまり話のできない人たちとの交流があるのでまた違った楽しみや、面白い話を聞くことができる。私は大学時代テニスサークルに参加してましたが、このフォーティーラブは大学時代のサークル以上にテニスの教え方がうまく、上達も早そうで、またパーティーの楽しさ（いろんな人たちとお話しができる）を感じ、これからは毎回参加を目指そうと思います。平成11年の第1回目は4月10日に津久井湖で初日は桜を見ながら花見をして翌日は桜の下でテニスという、テニス好きにはもちろんのこと酒好きの方でも楽しめると思います。まだ参加したことのない方、また一度参加してみたいと思っている方、是非参加してみて下さい。

㈱東亜ブック　鶴　竜次

第90回　72会ゴルフコンペ

高根カントリークラブ　1998.12.10（木）

1972年に発足した72会ゴルフコンペは、今回で90回目。発足当初からの参加は、ゲーテ書房の村山さん、UPSの斎藤さん、雄松堂の新田さんの三人だけだそうですが、90回、26年も続いているゴルフコンペ、何とも凄い、素晴らしい事だと思います。

当日は、曇り空ながら、風も無く、寒くもなく、まずまずの天候でした。コースは東亜ブックの鶴さんのホームコース高根カントリークラブ。武蔵野の森林に囲まれた美しい丘陵コース。距離もあり、崖あり谷あり林ありの難しいコースでした。

優勝は、豪快なドライバーショット、アイアンも安定していて、「出来すぎ」、「90台は久し振り、楽しいゴルフでした」とのコメントをいただいた丸善の鈴木さん。2位は、綺麗なフォームからの力強いショットで殆どフェアウェイをキープ、好調なゴルフの東亜ブックの鶴園江さん、見事でした。3位には、その実力を如何なく発揮されたUPSの斎藤さんが入賞。ドラコン、そして栄えあるベスグロ賞も併せて獲得されました。12月の多忙時ながら、談笑のうちのゴルフそしてパーティと楽しい一日でした。次回は斎藤さんのコース、天城にっかつホテル・ゴルフクラブ（静岡県）での、4月16日（金）泊まり、17日（土）プレイの予定です。多数のご参加を！

成績表		G	HC	NET
優勝	鈴木幹夫（丸善）	93	21	72
2位	鶴　園江（東亜ブック）	116	32	84
3位	斎藤純生（ＵＰＳ）	90	4	86
4位	戒井忍治（丸善）	103	17	86
5位	中林三十三（日貿）	95	8	87

ベストグロス　斎藤純生（ＵＰＳ）　G90

ドラコン　鈴木幹夫（丸善）斉田利幸（三善）
斎藤純生（ＵＰＳ）鶴　竜次（東亜ブック）

ニアピン　斉田利幸（三善）西山久吉（西山洋書）
鈴木幹夫（丸善）

（H. N. 記）

出版文化史逍遙—西から東から—(33)

明治初期の目録に見る洋書〔5〕

丸善・本の図書館　鈴木陽二

◆明治9年洋書リストにみる輸入の状況(5)

【ジョン・スチュアート・ミルの受容】(続き)

私塾の教材でミルの原書が使用された例として前回共立学舎を紹介したが、さらに付け加えたい。板垣退助の唱導で明治7年に土佐に創立された立志社は自由民権運動の先駆けになった結社であったが、教育機関として私塾「立志学舎」を設立し多くの人材を育てた。この学舎の上級講座では原書を使用し、その中にはベンサムやミル、ギゾー（フランスの歴史学者）などが含まれていた。ここに学んだ坂本南海男は坂本竜馬の甥であったが、彼などは明治初年よりミル、ベンサム、スペンサーの著書を愛読したという。河野広中を生んだ福島県は東北地方で自由民権運動の先駆的な地域であったが、彼は明治8年に「石陽社」を、明治10年には「三春正道館」を設立して自由民権思想の振興に努めた。これらの私塾でもミルの『利学』や『自由之理』など、翻訳書を教材として使用したという。

話が前後してしまったが、ここで丸善明治9年洋書リストにミルのどんな著作が収載されたのか、それをひとわたり紹介しておきたい。このリストには14点のミルの著作が掲載されており、1843年の "System of Logic" から始まって "Principles of Political Economy" (1848), "Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy" (1848), "August Comte and Positivism" (1856), "On Liberty" (1859), "Dissertations and Discussions" (1859-74), "On Representative Government" (1861), "Utilitarianism" (1861), "Subjection of Women" (1870), "Autobiography" (1873), "Three Essays on Religion" (1874) など、主著は概ね並んでいる。このリストを見ただけでも、明治初期におけるミルの摂取が如何に積極的で広範囲に及んでいたかが理解できる。ミルは1873（明治6年）に死亡したが、丸善のリストが発行される明治9年までには、彼の著作は漏れなくといっていいほど日本人に読まれていた、と考えることができるだろう。

ミルの場合明治も早い時期から原書で読まれたが、翻訳で見ても中村正直の『自由之理』のあと、重要な翻訳書は明治10年ころまでに出そろった。明治8年には『経済原論』の翻訳『弥児経済論』が林董と鈴木重孝によって行われた。林董はいうまでもなく、日露戦争直前に駐英公使として日英同盟を締結した功労者で、後年外相や逓信相を歴任した逸材であった。同じ明治8年に永峰秀樹訳の『代議政体』が刊行されて、『自由之理』とともに自由民権論者の必読書となった。明治10年になると『功利主義』が西周の訳で「利学」として刊行され、同年小野一郎訳の『弥児　経済惑義之弁（初講）』が出版された。また福沢諭吉の弟子の小幡篤次郎（後年慶応義塾塾長）によって『弥児氏宗教三論』が訳されて、丸善から発行されたのも明治10年であった。明治11年にはやはり福沢門下で高知の立志学舎で英語を教えた深間内基が訳した『男女同権論』（原作『婦人の服従』）が刊行され、同年『代議政治論』が小林儀秀の抄訳で『政体論』として文部省から上梓された。

ミルの翻訳でも、『コント実証哲学』『自叙伝』『ベンサムとコールリッジ』『論理学体系』などはずっと遅れて大正・昭和になってから刊行されており、これでみると明治初期における翻訳の傾向は自由民権思想と強く関係していた様子がうかがえる。

欧米の産業社会から生まれたミルの学術思想は、近代化に着手した日本人にとってどんなにか新鮮なものに映ったのか、その自由主義思想は、長い封建制度のくびきに抑圧されたエネルギーの解放の強い原動力となった。明治7年に古沢滋、由利公正、江藤新平、板垣退助、後藤象二郎、副島種臣ら8名の連署で「民撰議院設立の建白」が左院（当時の立法機関）に提出されたのが、自由民権運動の皮切りであった。この建白書は政府に受け入れられなかったものの、連名者それぞれが活動の基盤となる私塾や政治結社を設立するなどして運動が広がり、憲法制定と国会開設を要求する全国的な要求に結びついていった。明治の開幕とともに新しい国家建設や社会制度構築の理論として歓迎されたミルの思想は、自由民権論者の強力な道具として影響力を発揮した。

〔参照文献：山下重一『英学史の旅』／杉原四郎『J. S. ミルと現代／麻生義輝『近世日本哲学史』〕

『リレーションシップ・マーケティングのすすめ』

鳥居直隆

マーケティングは本当に変化の激しい世界である。ビジネスの最前線で常に新しさを求めて動いているのであれば、当然なことかもしれないが、それにしても変化が激しい。

これまで30数年間マーケティングの世界に身をおいてきたが、その間に応接したテーマやトピックスは数えればきりがない。平均すれば3～4年に一つ位の割合で新しい理論やテーマが提唱され、それが消化し切れない中にまた次のテーマが現われるという具合である。

もちろん発信源はアメリカである。ことマーケティングに関する限り、新理論、新テーマは全てアメリカ発であり、日本はそれをひたすら模倣或いは消化するだけである。今日においてもその姿は残念ながら変っていない。

新しいテーマが出る度にどっと洋書や洋雑誌に飛びつく。これまでどれ程洋書輸入業の皆さんにお世話になったことか。他の誰よりも早くそのテーマを理解し、紹介することが手柄となった。もっとも最近はそうした傾向は大分少なくなったが。

ところでこゝ10年～15年のマーケティング・メインテーマとなると、“顧客満足”“ブランド”“リレーションシップ・マーケティング”であろう。私個人としては、大変よい方向にむかっていると思う。これまでややもすればマーケティングは売上拡大、利益拡大を目指した技術やテクニックが中心とされてきた。しかしよく考えれば、売上を上げるにしろ、利益を上げるにしろ、その元は全て消費者である。消費者が全ての企業コストの負担者であることに気がつき、そこに戻ってマーケティングを考えようとするのは、自然なことといえよう。

顧客の満足が得られれば反覆購買が行なわれ、自然に売上げが向上する。それを長年にわたって続ければ信頼されるブランドとなる。今日のアメリカのスーパーで売られている商品について、上位約5000銘柄について調べたところ、100年以前から売られていたもの10%、75～99年からのもの26%、50～70年からのもの28%と、50年以前からのものを合計すると実に64%、⅔の多さである。まさにロングライフ・ブランドは企業の財産である。

こうした消費者の信頼に中心をおいて、マーケティングを推進しようとするのがリレーションシップ・マーケティングの考え方である。「マーケティングの究極の目的は企業と消費者のよい関係を維持向上することである」というのが新しいマーケティングの考え方である。それは当然一人一人の消費者と企業との関係であり、マスとしての消費者という考えはもうない。そこからさらに、1人1人と消費者と企業を直に結びつけてビジネスを行おうとする“ワン・ツー・ワン・マーケティング”が生まれてくる。

マスとしての消費者はそもそも存在しないものであり、1人1人好みや考えの違った消費者が存在する。その1人1人とどう結びつき、どうビジネスを行ってゆくかが問題なのである。サービス産業はまさにこの考え方で行わなければならないし、メーカーもまたその方向に進んでいる。

“囲い込み”なる言葉が金融界、流通・サービス界でよく使われているが、どうも私自身語感が好きになれないが、考え方としては正しいと思う。1人1人の求めているものに対応しよう、そのためには1人1人の仕事の内容や関心、好みといったものを調べなければならない。面倒ではあるが、それを行った企業が成長することは確かである。洋書輸入をビジネスとなさっている皆さんにも、ぜひリレーションシップ・マーケティングをおすすめしたい。　（完）

（東北芸術工科大学教授）

著者プロフィール

1932年　北海道旭川市生れ
東北芸術工科大学教授
（株）日本マーケティングシステムズ　代表取締役
昭和57年度日本能率協会マーケティング功労賞受賞
〈主な著書〉冒険するマーケティング（日本経済新聞社）ブランド・マーケティング（ダイヤモンド社）新製品開発事例研究集（日本能率協会）イメージの心理学（講談社）ほか多数

ウサギ年にはウサギ跳び

島岡　丘

トラ年が終わり、今年はウサギ年。昨年は「トライ」する年と書いてきた若い女性社員からは、今年の年賀状には、今までの独身生活に別れを告げ、ピョンと跳んで新婚生活に入りますと書かれていた。

「ピョンと」という表現がウサギをイメージしているのであるが、毎年正月に、十二支と自分の生活との組み合わせに面白さを見つけて、朗らかに生こうとするその若い女性のユーモラスなライフスタイルは楽しそうで微笑ましい。まわりにそういう人がいると明るい職場にもなるだろう。一方では、就職難、失業、学校破壊、カレー毒殺事件、税金逃れ、税金の無駄使いなど暗い世相で新聞を見るのも嫌になる人も少なくないのだろうが、マスメディアに載らない世界で、結構自由な生活をエンジョイしている人達も少なくない。いやな世相からは「ピョンと」抜け出したいという感じを抱く。

日本の正月は、前の年の暗い世相をすっかり忘れさせてくれるすがすがしさがある。町の雑踏は消え、空気もきれいで遠くの山々がくっきりと見え、忘れかけた人間らしい生活がもどってくる。正月は郷里で久しぶりに親戚や昔の学友たちと顔合わせ、懐かしさを思い起こしながら談笑して楽しむ人、家族揃って海外観光に出かける人、テレビで紅白歌合戦を見た後、神社参りをする人それぞれ普段の生活と異なる楽しみ方をして楽しい年の門出を祝う。

私はしばらくぶりで、北海道のスキー場で正月を過ごしに出かけた。パッケージ・ツアーのせいか、飛行機もバスもほぼ満席だった。正月には地元の人達が餅つきをして、つきたての餅を無料で食べさせてくれたり、甘酒をサービスしてくれたり、夜でも滑られるように、ゲレンデをライトアップしてくれたり、スキーにふさわしい音楽を拡声器で流したり、松明滑降、スキー場近くの倶知安神社の参拝など、年1回とはいえ、数々の忘れがたい良い思い出を与えてくれた。

最近は年輩者でも楽しくすべられるようにということで、長さを130センチに押さえ、安心して滑られるようにスキーの両端がやや広く、足下がやや狭い「カービングスキー」が登場した。これだと回転しやすく、たとえ転んでも起き上がりやすいので、安心である。スキー場は昔のように一歩ずつ登る必要はなく、自信がある人は頂上までゴンドラで、初級者はリフトで、中腹まで行くことができ、滑降を楽しめる。リフトやゴンドラに乗るのにはカード式のチケットを腕章のように留めておき、それがリフトやゴンドラの乗り口にある反応器に触れるだけで扉が開く仕掛けになっている。

スキーは楽しみであると同時に怖さもある。私についてくれたコーチは「スキーはチャレンジですよ。山の斜面と格闘するつもりで滑るのがいいですよ。怖いと思ったら、その瞬間に重心が上半身に上がってしまい、倒れやすくなります。ストックの握りの部分が視覚に入るぐらいにして、腰より低い位置にし、両手を左右に広げ、「やじろべー」になったようなつもりでバランスをよくとれるようになれば転ばなくなり、パウダースノウの斜面を楽しく滑ることができます」という趣旨のことを私に教えてくれた。その人は地元倶知安市役所につとめておられる和田さんという方で、毎冬多くのスキーヤーにスキーの基本と技術を教えておられるそうだ。

2001年まで残すところ2年になった。何かと別れを告げようとすると、日本人は感傷的になる傾向があるようだ。辞世の句を詠むのがその典型だが、長年勤めた大学を定年で辞める教授がいると、まわりはほっておかない。送別会だけでなく、辞世の句を聞くような気持ちで、最終講義をお願いして、去りゆく教授に花道を提供すると同時に精神的なつながりを幾久しく保とうとする。このような感傷性は決して悪いものではなく、まわりの人達との思い出の絆をさらに強めることにもなろう。しかしすべての教授に当てはまるわけではない。一国一城の主でエゴ中心に生きてきた人はまわりはそのように遇し、静かに見送ることになる。

数年前、シドニー大学で学会があったとき、言語学者で有名なM.A.K.ハリディ先生に、日本の大学には、習慣的に最終講義というのがあるが、先生の場合は最終講義のようなものをおやりになるかどうか尋ねたことがあった。ハリディ先生は、最終講義という慣習が初耳だったらしく、そういうものはやらないで、ただ、数名の教え子達と一緒にバーに飲みに行くのだと答えられた。

1月にあたる英語はJanuaryで語源は2つの顔をもつヤヌス、Janusであると言われている。1つの顔は前の年を見、もう1つの顔は新しい年を見ている。人によって、過去の方をよく見ている人と、前を常に見て、前向きに生きている人とがいる。どちらも必要であるが、若い世代はとかく好き嫌いで判断することが多く、過去

の出来事をあまり見ようとしないのではないか。少なくとも教育に携わる場合は過去半世紀ぐらいは視野に入れてほしいと思う。

過去を振り返るということで、私は最近、貴重な経験をすることになった。80才を越えられてもますますお元気な恩師の太田朗先生（東京教育大学名誉教授）は1960年9月から翌年1月にかけて、ユネスコフェロウとして、主要8カ国を5ヶ月間かけてまわられ、各国の社会情勢とそれに関連する形で、英語教育の詳しい実情の記録を出版されたいというご希望を伝えられた。物事の本質を捉えるには少なくとも半世紀のスパンが必要であるという考え方を私自身抱いていたので、日本の盛衰にも関連する英語教育を諸外国と比較する資料が得られることは実に得難い事であり、ぜひご出版をお願いした。幸い丸善が出版を引き受けてくれたので、各地で英語教育に携わっておられる英語教育の専門家、小中高の英語の先生、将来英語教師を目指す学生たちに広く読まれることを願っている。

その内容は、先生の玉稿の段階で目にすることができた。視察された国は、インド、ロシア（旧ソ連）、西ドイツ（東西ドイツ統合以前）、スェーデン、デンマーク、オランダ、フランス、イギリスの8カ国だった。漠然とした教育事情視察ではなく、予めユネスコなどを通して、各国の英語教育の専門家とアポイントメントを取られ、長時間対談されたばかりでなく、詳細にわたるアンケート用紙に記入させるという方式で、各国の英語教育への取り組み方を描き出された。私自身、太田先生の玉稿を読ませていただいた後、次のような解説を書いた（一部略）。

「1960年と聞くと、一見古い過去のことと考えがちであるが、現在の状況は、過去から発展して来たものであり、当時の実情を知っておくことは必要であり、有益である。この意味で本書は、現代において得難い貴重な記録になっており、英語教育を広い視野で考える際の典拠と言える。

著者が訪れた8カ国は一国一言語の国もあれば、インドやロシアのような多言語国家もあり、またそれぞれの国にはそれぞれの問題を抱えている。英語教育を含む外国語教育もそれぞれの国内事情と密接な関係がある。英語教育が単に技術上の教授法の問題でなく、国情や国民性によって異なっている様子が、著者の鋭い観察眼で的確に捉えられ、かつ明確に記述されている。これらの内容は日本における英語教育はまず国内事情と母語の日本語を正確に把握することと、外国における英語教育の背景的事情を考慮に入れるという2つの重要性を物語る。

著者が視察旅行に出かけられたのはおよそ半世紀前であるが、その時の教育制度のもとで英語を学習した生徒たちが年齢からいって、現在各国の指導的な立場に立っていることになる。彼らの受けた英語教育が適切で効果的なものであるならば、半世紀後の現在、英語を身につけていることになる。この意味では本書の記述内容は現在と過去を比較できるという歴史的なメリットをもっていると言えよう。

本書の各章は前半が著者自身が観察し、体験したことがありのままに書かれており、後半はそれに関連した形で英語教育に関する記述になっている。前半に著者自身の体験を入れられたのは、気楽に読んでもらいたいとご意向もあるが、著者自身の見聞を通して、これら8カ国の英語教育の目的、必要性、特色などが、臨場感をもって、より深く理解できるようになっている…。」

21世紀にピョンと跳ぶには、20世紀の重荷を背負っていては駄目である。これまでの情報を整理し、価値あるものを選び出す作業が必要である。楽しい思い出をアルバムにしてもっていくのも良いであろう。しかし、故Martin Luther Kingが言ったことに注目しよう。

「私がこの世に残しておきたいたいのは、メダルとか名声ではない。この世に残したいのは、“committed life”である。」

Kingが言った“committed life”の意味は、何か一つの目標実現に向かって「ひたむきに努力した生き様」という意味である。太田朗先生の『私のグランドツァー－英語教育の〔再考〕のための参考資料』（仮題）にあるように、どの主要国でも、予算の制約、国民性、伝統などと英語教育の理想の実現とのぎりぎりのせめぎ合いが行われてきたことを知るにつけ、諸外国の事情を知ることの大切さを感じさせられた。外国に出かけると不思議と日本が見えてくる。

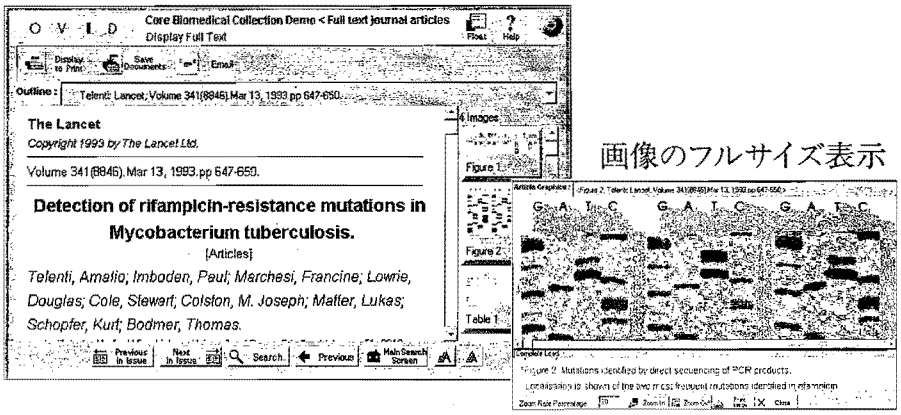
（茨城キリスト教大学教授）

Journals@Ovid

O V I D

Journals@Ovidは、Ovid社のオンラインジャーナルで、医学生物学分野の重要誌を中心に約350誌を提供します。任意の雑誌を選び年間購読する形式を取っていますが、購読タイトルに関係なくJournals@Ovidに収録された全ての雑誌が検索でき、書誌事項まで参照できます。契約誌はオリジナル文献まで参照でき、高画質のフルカラーイメージの出力も可能です。インターフェイスは同社が提供する全ての1次資料、2次資料を通し共通で、MEDLINEやEBMRとの論文単位のリンク機能や、Journals@Ovid内部での引用を基にしたリンク、機関LANとして導入したOvidNetからのハイブリッドリンクも実現しています。

フルテキスト画面



画像のフルサイズ表示

検索インターフェイス：	Web Gateway、Java Client
フォーマット：	SGML
バックファイル：	1996年以降(一部1993年以降)
料金体系：	年間購読制(購読後の所有権保証)
リンク可能2次資料：	MEDLINE、PsycLit、Cinahl、EBMR、Current Contents、Biological Abstracts、EMBASE

日本総代理店

USACO®

電子メディア・グループ

TEL：03-3502-6472

E-mail：e-media@usaco.co.jp

ユサコ株式会社

〒105-0004 東京都港区新橋1-13-12

FAX：03-3593-2709

Homepage URL http://www.usaco.co.jp/

1999年1月　通巻第380号　日本洋書協会　編集者　高橋　紘

〒103-0027 東京都中央区日本橋1－21－4 千代田会館5階20号室 ☎(03)3271－6901 FAX.(03)3271－6920

印刷所＝藤本綜合印刷株式会社